

## 第2節 「おふでさき」において用いられる単語の推移

(岡尾将秀)

### はじめに

天理教の原典の1つ「おふでさき」は教祖中山みき自身によって執筆されたとされる和歌1711首の集成である[1]。1号当たり約100首ずつ、執筆された順に、全部で17号にまとめられている[2]。教祖を世界と人間を創造した主体としての神と同一視しようとする天理教の教義においては、全ての歌が神自身によって疑いようのない真実として発せられた言葉から成っているとみなされている。

ところが、かつて教団を統率した2代真柱中山正善も指摘したように、神を表わす語が「神」「月日」「をや」と3種類あり、それらがこの順で、号が進むにつれ、入れ替わっていているという事実がある[3]。そしてここから、中山みきが人間としてその思想を展開していったのか、神の救済について周囲の人達の信仰の成長に応じてわかり易く説いていったのかという非常に重要な問題が生じる。本稿は、教外の観点からの報告であるため、原則として前者の観点から出発している。しかし、決してそれを結論として主張することに固執するわけではない。大量の文字のなかに散らばっている単語の数を自動的に数えてくれるという電算機のプログラムを利用するという最低限の課題があるからである。神を呼称する語とともにどのような語がどのくらい用いられているかを示すことによるのみ、みきが3つの神の呼称を用いたそれぞれの理由を探求していきたい。

### 1. 集計と結果

分析に先だって、まず、KTCoderで、コーディングすることを考えた[4]。そのため、「おふでさき」の全文をテキストファイルとして入力した。そして、1号から17号までの各号ごとにHTMLタグをつけた。それ以上の階層構造は考えなかった。つまり、各号の始まりに<H1>を、終わりに</H1>をつけ、全体を<BODY>、</BODY>で囲った。

複合語辞書の作成にあたっては、教内で編集された『おふでさき索引』の語句の索引を参考にしながら[5]、まず数の多さが目立つ語から選んでいった。しかし、できるだけ教義上重要と思われる語を選んでいくことを目標にした。例えば、「事」という語は、極めて多かったが、あまりにも多様な用いられ方をしているので、少なくとも現段階では分析不可能と判断した。逆に、「せかい」に対する「うち」のように、一方が非常に頻繁に用いられている語に対比されて用いられていると考えられる語を含めるように努めた。もちろん、『おふでさき索引』などから、全体の度数が5にも満たないことが明らかであった語は削除した。しかし、「ざんねん」、「さんねん」、「ざねん」、「さねん」あるいは「をしゑ」、「を

しへ、<sup>レ</sup>「ふしへ、<sup>レ</sup>「ふしゑ」など同じ語の異なった文字での表記であることが明らかで合計が5を超えそうな語は見逃さないようにした。そして、KTCoder で抽出された抽出単語のデータを SPSS に読み込み、集計した結果が、表 1 の集計表である。

全体の度数が多い語のほとんどが、教義上も重要な語であるといっていよう。例えば、300 を超えるような「月日」「心」「みな」は、人間と世界を創造した神「月日」の「心」が全ての人々の「心」の浄化によって本来の守護をもたらすと説く救済観において基本的で不可欠な概念である。しかし、上の中山正善の研究において取り上げられた「をや」の度数が78で223みられた「神」の半数にも満たなかったように、踏み込んだ解釈をする際に極めて重要と思われる語で、意外と度数の少ない語が目についた。神の働きの自由自在を表したと考えられる「ぢうよ」(自由)は42で、支配層を意味すると考えられる「高山」は31にすぎなかった。また、例えば、78みられた「をや」に対して「子共」が4、237みられた「から」に対して「にほん」が42というように、非常に頻繁に用いられている語に対比して用いられている語の度数の少なさも想像以上であった。

表1 集計表

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
月日	374	8.8	8.8	8.8
心	345	8.1	8.1	16.9
みな	314	7.4	7.4	24.2
から	237	5.6	5.6	29.8
神	223	5.2	5.2	35
みち	160	3.8	3.8	38.8
せかい	156	3.7	3.7	42.4
はなし	145	3.4	3.4	45.8
しんぢつ	142	3.3	3.3	49.2
をもう	139	3.3	3.3	52.4
いままで	118	2.8	2.8	55.2
たすけ	118	2.8	2.8	58
はやく	99	2.3	2.3	60.3
これから	97	2.3	2.3	62.6
一れつ	92	2.2	2.2	64.7
このよ	92	2.2	2.2	66.9
このたび	91	2.1	2.1	69
にんげん	88	2.1	2.1	71.1
けふ	83	1.9	1.9	73
たんたん	80	1.9	1.9	74.9
うち	79	1.9	1.9	76.8
をや	78	1.8	1.8	78.6
つとめ	75	1.8	1.8	80.3
はじめ	69	1.6	1.6	82
にちにち	62	1.5	1.5	83.4
だんだん	59	1.4	1.4	84.8
もと	54	1.3	1.3	86.1
せきこ	52	1.2	1.2	87.3
をもふ	42	1	1	88.3
ぢうよ	42	1	1	89.3
にほん	42	1	1	90.2
しんちつ	36	0.8	0.8	91.1
さんねん	34	0.8	0.8	91.9
をしへ	34	0.8	0.8	92.7
さんねん	33	0.8	0.8	93.5
高山	31	0.7	0.7	94.2
はたら	28	0.7	0.7	94.8
いさむ	26	0.6	0.6	95.4
をしゑ	23	0.5	0.5	96
かんろ	20	0.5	0.5	96.5
ざねん	15	0.4	0.4	96.8
はぢめ	14	0.3	0.3	97.1
さねん	13	0.3	0.3	97.4
元	13	0.3	0.3	97.7

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
いさめ	11	0.3	0.3	98
一ちよ	11	0.3	0.3	98.3
山山	7	0.2	0.2	98.4
いさん	7	0.2	0.2	98.6
ふしへ	4	0.1	0.1	98.7
子共	4	0.1	0.1	98.8
ふしゑ	4	0.1	0.1	98.9
上下	3	0.1	0.1	98.9
十五日	2	0	0	99
廿六日	2	0	0	99
十一	2	0	0	99.1
一日	2	0	0	99.1
二人	2	0	0	99.2
三人	2	0	0	99.2
六月	2	0	0	99.3
火水風	1	0	0	99.3
一事	1	0	0	99.3
三十六人	1	0	0	99.3
今日	1	0	0	99.4
六十	1	0	0	99.4
正月三十日	1	0	0	99.4
七十	1	0	0	99.4
三月	1	0	0	99.5
月	1	0	0	99.5
八月	1	0	0	99.5
三年三月	1	0	0	99.5
三十九	1	0	0	99.6
六日	1	0	0	99.6
九百九十	1	0	0	99.6
五分五分	1	0	0	99.6
五人	1	0	0	99.6
三十八	1	0	0	99.7
五十六十	1	0	0	99.7
三十八年	1	0	0	99.7
三尺	1	0	0	99.7
五分	1	0	0	99.8
火水	1	0	0	99.8
五月五日	1	0	0	99.8
二尺四	1	0	0	99.8
三六二五	1	0	0	99.9
正月廿	1	0	0	99.9
十九人	1	0	0	99.9
百十五才	1	0	0	99.9
五十	1	0	0	100
二二	1	0	0	100
九人	1	0	0	100
合計	4263	100	100	

## 2. 神に対する3つの呼称

中山正善が明確に指摘した神に対する3つの呼称「神」,「月日」,「をや」の呼び換えの事実を確認することからとりかかった。明らかであるだけに重要であり、本稿の観点からさらに正確に把握し直しておきたいからである。まず、号毎の度数を折れ線グラフに表わしたものが図1である。第5号までの「神」の替わりに、6号からは「月日」、14号から

は「をや」が主に用いられていることが確かめられた。

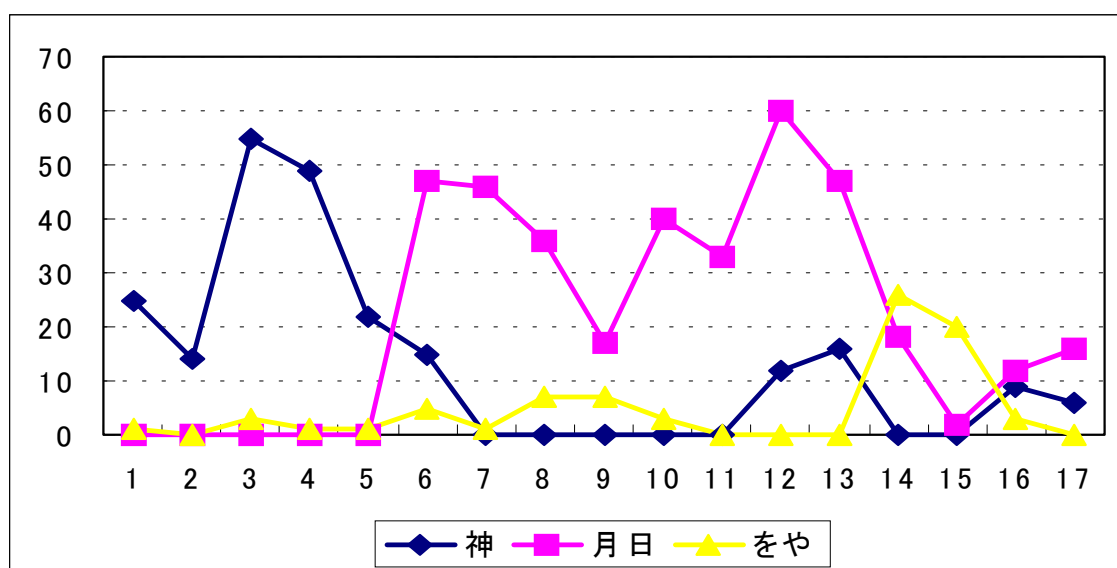


図1 「神」「月日」「をや」の度数

1つ呼称が主に用いられている間は、他の2つの度数が少なくなっている。たしかに集計表でもみたように、「をや」の度数は、「神」、「月日」に比較してあまりに少なすぎるかもしれない。しかし、この差は、号毎の歌の数がほぼ100首を中心としてではあるがかなり前後していることによって、誇張されているともいえる。特に「神」と「月日」が主に用いられる3号や12号の歌数が149首、182首であるのに比べ、「をや」が主に用いられる14号、15号の歌数は92首、90首と約半数である。そこで、号毎の度数の、歌の総数に対する比率を、相対度数として、その推移をみってみる(図2)。

14号と15号における「をや」の相対度数が高いことがいくらかはつきりする。ついでに、4号までの「神」の相対度数と10号から13号までの「月日」の相対度数が安定していることも明らかになる。歌数が47首で極度に少ない2号において相対度数が意外に高いことや逆にかなり多い3号や12号において低いことが示されるからである。ところが、号毎の歌数の違いによる影響を取り払うことによって、全体における「神」から「月日」、「をや」への呼称の推移からはずれる事実も、同時に際立ってくることになる。

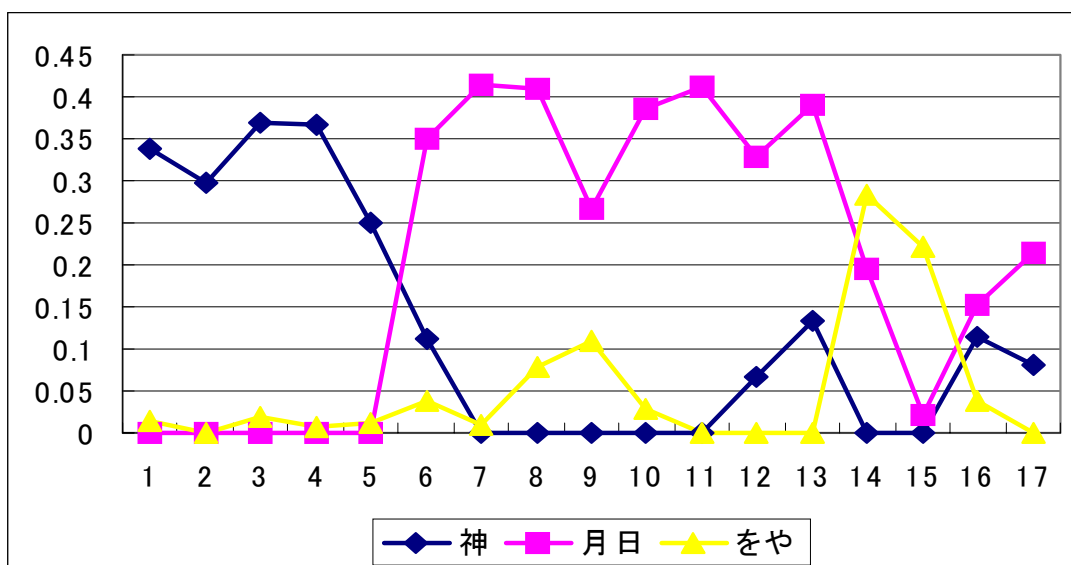


図2 「神」「月日」「をや」の相対度数

1つには、既に8号から10号においても、「をや」の相対度数がその前後に比較すると高くなっている。もちろん、この事実は、既に中山正善の研究においても意識されていた。すなわち、「教祖」を指示している「をや」は、ここではいまだ「天の月日」とは区別できる「地上の月日」であり、両者が「融合」したものとして使用される14号以降の「をや」と完全には同じではないと理解されていた。しかし、8号から10号の間で「をや」の相対度数が最高となっている9号において、「月日」の語の相対度数もその前後に比べてかなり低くなっているのはなぜだろうか。少なくとも既に「をや」が「月日」の代わりに、「天の月日」として用いられている例がないか確かめてみる必要がある。

もう1つには、14号以降「をや」の相対度数がいったん「月日」のそれを超えた後でも、16号と17号において、再び「をや」に替わって「月日」と「神」が用いられている。特に17号に至って、「をや」の語が全く使用されなくなる事態は無視できないように思われる。

これらの事実を重視して、それでも全体的には確認しうる「神」、「月日」、「をや」の呼び換えの順序が絶対であるとするならば、「おふでさき」の各号に記載された執筆年をそのまま信じることができないことになる。特に、「をや」の語が再度使用されなくなっている17号は、その原本には執筆年が記載されていないこともあり、執筆の最後の年である明治15年に執筆されたという推測を疑うことになる。しかし、この推測は、中山正善自身も認めていたであろうし、現段階では特に疑う根拠があるわけでもない。それゆえ、いったんほとんど用いられなくなった呼称が再度用いられている事実に従って、順序は絶対ではないと考えざるをえない。

さらに、上の2つの事実がみられる9号や16号をはじめ、6号や13号、14号でも複数

の呼称が同時に用いられている事実も付け加えられる。この事実は、上の研究において、度数も少ないという理由で、三つの呼称が「混用されている例外」とみなされていた。たしかに、特に6号は「神」から「月日」への14号は「月日」から「をや」への移行の途上にあるとみることができる。しかし、上の2つの事実を説明していくためには、この事実も重視していかざるをえないであろう。一つの呼称を主に用いるとき、決して他の呼称の使用を完全に停止しているわけではないと考えられるからである。もしみきが1つの呼称のみを用いたならば、一度用いなくなった呼称を再度用いることはありえなかったであろう。

これら3つの呼称に関する問題は、神を呼称する語の相対度数の推移を追っているかぎり、一向に解明されないことはいうまでもない。以下ではまず、みきの世界観において神と観念の次元で極めて強く関係すると思われる「にんけん」と「心」という語の相対度数の推移を考察していくことにする。比較的神の呼称とともに用いられやすいと予想されるそれらの語がいずれの呼称とそうなのか、あるいはそうでないのかを見分けることで、3つの呼称それぞれの用いられ方の違いを示すことができ、その理由を推測していくこともできるからである。

### 3. 人間の位置づけ

神について観念されるとき、それに対比して、人間についても観念されると考えることができる。そもそも神は、自分たち人間に優越する存在として、想定されているといえるからである。下の図3の「にんけん」の号毎の相対度数の推移も、非常に大ざっぱに見るなら、「神」と「月日」の相対度数の推移と相関しているといえなくもない。たしかに、「にんけん」の相対度数が前後に比べ高くなっている3号では「神」、6号から8号と11号から13号では「月日」の相対度数も高かった。

しかし、「おふでさき」において明らかに人間を意味している「にんけん」という語は、1号と2号では、既に「神」が頻繁に用いられているにもかかわらず、全く用いられていない。神による人間の創出と世界の造形に言及し始める3号において、突如用いられ始めている。そして、「月日」が突如頻繁に用いられ始める6号において、人間創出と世界造形の過程がより詳細に述べられるようになると[6]、さらに頻繁に用いられている。したがって、「にんけん」の語は、何よりも主体としての神が創造した客体として、用いられていると考えることができる[7]。もっともこの解釈は、「をや」が頻繁に用いられている9号前後あるいは14号と15号で「にんけん」の頻度が比較的低くなっている事実には反するといえる。というのは、「をや」という呼称も、人間の親への喩えとみることができ、神の人間を生み出した側面を強調していると考えられるからである。しかしさらに、子供を育成する側面を強調していると仮定すると、「をや」が、神の呼称であるにもかかわらず、神の像がより人間のそれに近くなり、明確に人間と対立されなくなったと解釈するこ

ともできる。

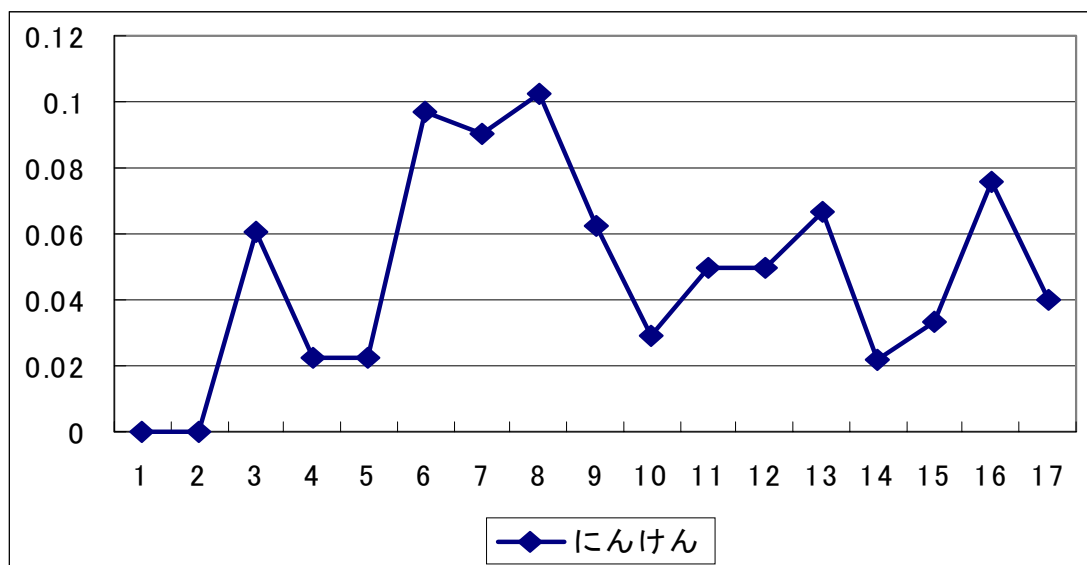


図3 「にんけん」の相対度数

#### 4. 神の心と人間の心

三つの呼称の用いられ方の違いをより明確に把握するために、次に、目にはみえない形而上の主体を表現しているとみなすことができるがゆえに、人間にのみならず神にもあるとみなされる「心」の語が使用される号毎の相対度数の推移をみた(図4)。

一般に、「心」という語は人間の心として使われる。しかし、「おふでさき」において、「心」が号毎に用いられる相対度数は、8号と16号での減少以外、全体としてはほぼ神の呼称の相対度数の増減に相関して推移しているといえる。しかも、8号と16号をはじめ、1号、2号などで上の「にんけん」の語の相対度数の増減と逆になっていることがしばしばである。したがって、神の話とみなされる「おふでさき」においては、「心」が人間の心としてよりもまず神の心として使用され易いといえる。

ところが、神による人間創出について言及し始めた3号以降、明らかに人間の心を表わしている「心」が出現するようになることも事実である[8]。これについては、神の心を表わす「心」の度数に対する人間の心を表わす「心」の度数の比率の推移を知りたいところである。同一歌内で「心」の前に、「神」または「月日」といった神の呼称がある場合と「にんけん」や「上」など人間を指示する語がある場合と数え分けることができれば不可能ではないだろう。

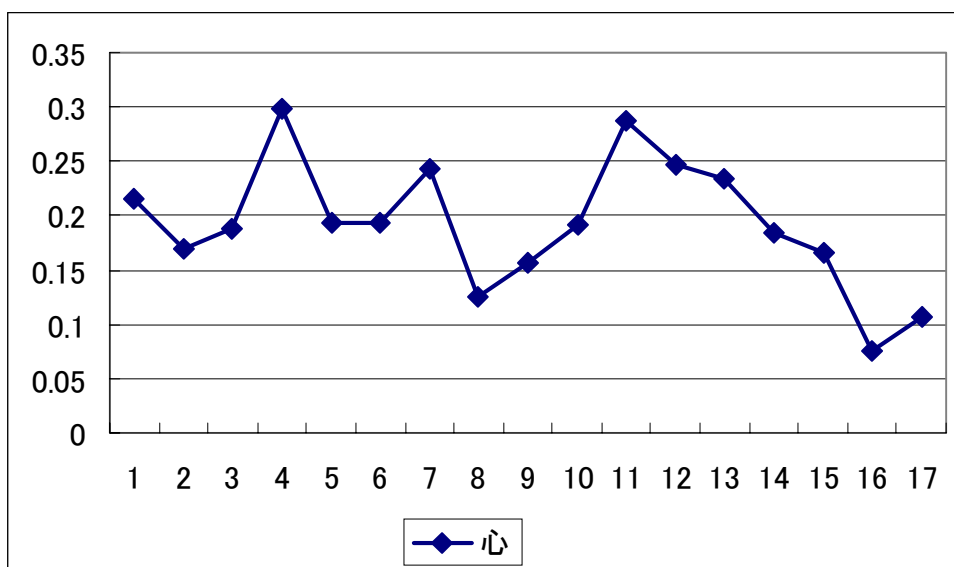


図4 「心」の相対度数

また、「心」が用いられる相対度数が減少しているように見える8号から10号と14号、15号についても、人間の心を指示する「心」と神の心を指示する「心」とを数え分けた。というのは、これらの減少は、「をや」の9号周囲での少しばかりの増加と14号と15号におけるより大きな増加に、大雑把な対応をしているとみることができるからである。ここでは、「をや」の「心」があまりみられないという事実があることから[9]、神の心を表わす「心」の度数に対する人間の心を表わす「心」の度数の比率が、「神」、「月日」が主に用いられているところ以上に、高くなっている可能性がある。つまり、全体としてはいずれの神の呼称とも相対度数の増減が相関しているように見える「心」の語は、何よりも「神」の心を表わすために使用され始めたものの、「月日」さらには「をや」の呼称が用いられる相対度数の上昇とともに、「にんけん」の心を表わす傾向が強くなっていった可能性があるのである。

## 5. 残念という心

ここでさらに、「ざんねん」、「さんねん」、「ざねん」、「さねん」という語の号毎の度数の合計を「残念」という語の度数とし、その度数の号毎の歌の総数に対する相対度数の推移をみることにした(図5)。それらのいずれも、神の要求に完全に答えきれない人間に対する嘆きの感情を表現していると解釈でき[10]、意志のみならず感情を含んだ「心」の負の状態を表しているということが出来る。それゆえ、「残念」の号毎の相対度数も、「心」の語やその用い方に変化を促している可能性のある神の3つの呼称が用いられる相対度数の増減と何らかの関係をもって推移している可能性がある。



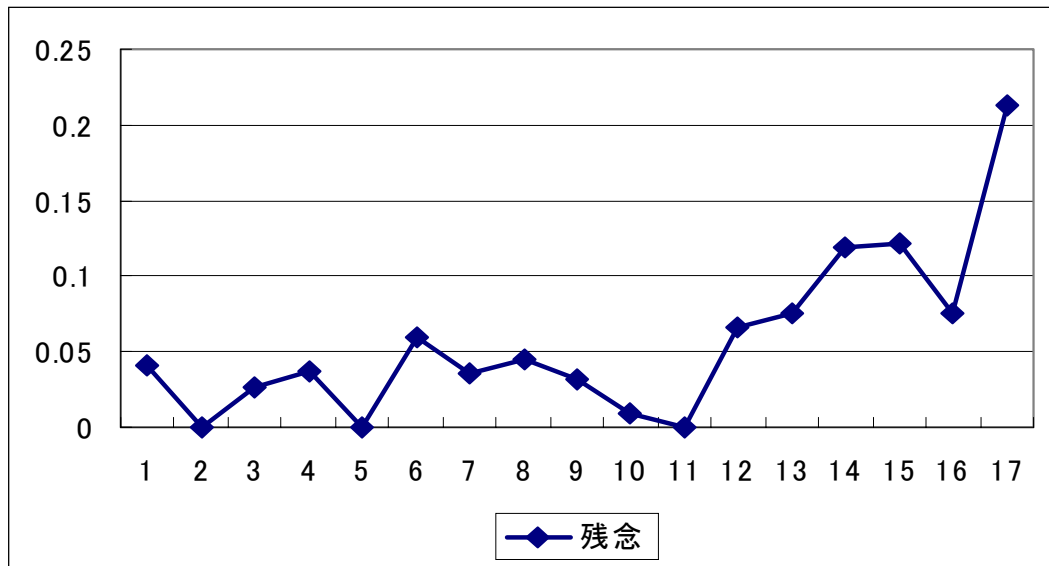


図5 「残念」の相対度数

全体の傾向としては、「神」、「月日」、「をや」の3つの呼称がそれぞれ頻繁に用いられるたびに、「残念」の用いられる相対度数も高くなっているといつてよいのではないだろうか。さし当たり、「神」の語が頻繁に用いられている1号、3号、4号、「月日」の語が頻繁に用いられている6号、7号、8号と12号、13号、「をや」の語が頻繁に用いられる14号、15号においては、「残念」の号毎の相対度数が、前後の号に比較すると、高くなっている。しかし、その高さは、後の号になるにつれ次第に高くなっている。それゆえ、「残念」は、「心」とは逆に、「神」よりも「月日」、「月日」よりも「をや」と同じ号で用いられやすいといえる。また、16号における減少と17号における極度の増加を除くならば、8号と特に11号で「心」の相対度数の増減と全く逆になっている。したがって、「残念」という感情を表す語は、「いさむ」や「りいふく」など他にもいくつかみられる神の心のある状態を表す語の一つとして、「心」という語の代わりに用いられた可能性がある。同じ歌内でそれぞれの呼称と用いられる場合を数えることによって、後の号になるほど「にんけん」の「心」とともに「をや」の「残念」が用いられる場合が増えていくことがわかるかもしれない。

もっとも、「残念」を表わす語が、17号において極端に頻繁に用いられている事実は、「をや」と最も用いられやすいという今の説明に完全に反していることは否定できない。しかし、この事実から、中山正善の研究で提示された「神」、「月日」、「をや」の呼び換えの順序に反して、17号において「をや」が全く用いられなくなっている事実が、逆行を意味しないということもいえるだろう。というのは、「残念」を表わす語は、14、15号において特に共に用いられる相対度数の高い「をや」のみならず、6、7、8号においては「月日」、1、3、4号においては「神」とも用いられており、後の号になるに従って、いずれ

の神の呼称とも、ともに用いられる場合が増えていくと考え直すこともできるからである。この問題をさらに考えていくためには、神の呼称以外にも、「残念」を表わす語とともに用いられ易い語を探しだす必要がありそうである。

## まとめと課題

以上、神を呼称する「神」<sub>」</sub>、「月日」<sub>」</sub>、「をや」という語と、神の観念との関連が特に強い観念を表わしているといえる「にんけん」<sub>」</sub>、「心」<sub>」</sub>、さらに「心」の特定の状態としての「残念」を表わすという語の相対度数の号毎の増減の関連をみようとしてきた。少なくとも「神」に対して「心」が、「月日」に対して「にんけん」が、比較的ともに用いられやすいことが明らかになった。また、「をや」という語に対しては、「にんけん」<sub>」</sub>、「心」のどちらの語とも共に用いられにくいかわりに、「残念」を表わす語だけは用いられやすいこともわかった。したがって、みきが同じ神を三様に呼び替える背後にはそれなりの教義上意味ある意図があったといっただけではないだろうか。中山正善は、神の社としてのみきが聞き手である人間がより親しみ易いように、「神」を「月日」に、「月日」を「をや」に「置き換え」ていったと理解していた。しかし同時に、「月日」の相対度数の一時的な低下がみられる9号前後で「をや」の相対度数が増加するとともに「にんけん」と「心」の双方の相対度数が低下していること、一方、「をや」の語が用いられなくなっていく16号と17号において「神」と「月日」が再度頻繁に用いられるにもかかわらず、「残念」を表わす語の相対度数が、「をや」が頻繁に用いられている14号、15号における相対度数を超えているということもみられた。それゆえ、みきは、特に「月日」から「をや」への神名の変更を14号における歌ではっきりと宣言したように[11]、たしかに神を呼び替えようとしたのだが、その意図は完全には遂行されず、古い呼称も用いつつ呼び分けるにとどまったということも不可能ではないだろう。例えば「月日」という呼称が突如頻繁に用いられ始める6号において人間創造についてのより詳細な話を始めている事実などから、3つの呼称それぞれを用いる教義上それなりの理由があったことは間違いないだろう。しかし、みきが神に対して用いた呼称が、「神」から「月日」を経て「をや」に収束していったという結論は保留する必要があるだろう。

みきが神に対して3つの呼称を用いた理由を、彼女自身が意図していなかった条件を含めて把握していくためには、「にんけん」<sub>」</sub>、「心」<sub>」</sub>ほど神についての観念と関連して用いられないかわりに、彼女が置かれていた実際の状況に対する彼女の認識できれば行為を表す語で、号毎の相対度数が神に対する特定の呼称と相関して推移する語を見出したいところである。というのは、みきが「神」をまずは「月日」さらには「をや」に置き換えようとした一つの動機として、本来実体をとらえることができない神を、普通の人間も普段の生活において目にするのできる、さらには接することのできるものとして、何とか周囲の人達に表現しようとしたことを考えることができるからである。例えば、空間に関する「せ

かい」と「うち」から」と「にほん」高山」と「たにそこ」上」と「みな」あるいは「一れつ」また時間に関する「いままで」と「このたび」と「これから」だんだん」と「はやく」さらに救済の実現の主体としての神の働きが自由自在であることを表現するために用いると考えられる「ぢうよ」やみきの周囲の人々に対する早急な救済実現の要求としての「せきこみ」といった語などは、みきの救済を前提とした世界観を構成する比較的具体的な言葉として重要である。もちろん、これらのいずれも、試行錯誤の段階にある現在、神の呼称のいずれかとの相対度数の増減の十分な相関を見い出せているわけではない。しかし、本稿で最後に考察した「残念」を表わす語のように、「心」など神のいずれかの呼称とともに用いられていると考えられる語の度数の増減との相関を手がかりすれば不可能ではないと思われる。

## 注

[1]五七五七七の形式で主に平仮名(原本は変体仮名)で書かれている。冒頭の3首をあげておくと、「よろつよの せかい一れつ みはらせど むねの八かりた もの八ないから」そのはずや といてきかした 事はない なにもしらんが むりでないそや」このたびハ 神がをもてい あらハれて なにかいさいを といてきかする」なお、データとして使用した「おふでさき」は以下全て筆者が村上重良『民衆宗教の思想』岩波書店、1971年、所収のものをテキスト形式で打ち込んだものである。その際、繰り返しを表す記号はワープロの辞書になかったので、同じ文字をそのまま反復した。例えば、「だんー」(「ー」の部分繰り返し記号)は「だんだん」とした。

[2]各号の執筆された時期(推定を含む)と歌の総数は以下の通りである。

第1号	明治2年1月	74首
第2号	明治2年3月	47首
第3号	明治7年1月	149首
第4号	明治7年4月	134首
第5号	明治7年5月	88首
第6号	明治7年12月	134首
第7号	明治8年2月	111首
第8号	明治8年5月	88首
第9号	明治8年6月	64首
第10号	明治8年6月	104首
第11号	明治8年6月	80首
第12号	明治8年12月から明治9年6月(推定)	182首
第13号	明治10年4月から10月(推定)	120首
第14号	明治12年6月	92首
第15号	明治13年1月	90首
第17号	明治15年(推定)	75首

[3]中山正喜『『神』『月日』及び『をや』について』(天理図書館『日本文化』第2号、1935年(昭和10年))。それぞれ一首ずつ例を挙げておくと、「だんだんと 神のゆふ事 きいてくれ あしきのこと八 さらにゆ八んで」(第1号59首目、以下1-59と略す)「このよふの 月日の心 しんぢつを しりたるものわ さらにあるまい」(6-9)「けふまでも やのさねんと ゆうものわ 一寸の事でわ ないとをもゑよ」(14-32)。

[4] KTCoder については、第1部第2章を参照。

[5] 天理教教義及史料集成部編纂『おふでさき索引』、天理教道友社、1946年。全ての単語が列挙されるとともに、それが用いられている歌が何号の何番目にあるかも記されている。

- [6] 「このよふの 元はじまりハ とろのうみ そのなかよりも どぢよばかりや」(6 - 33)  
「そのうちに うをとみいとが まちりいる よくみすませば にんけんのかを」(6 - 34)  
「それをみて をもいついたハ しんぢつの 月日の心 ばかりなるそや」(6 - 35)と  
いうように、神が人間を創造する際に種としたとされる「どぢよ」や道具として用いたとされる「うを」や「みい」などが指定されていった。
- [7] このことがわかり易く表現された歌として、「このよふの にんけんはじめ もとの神 たれもしりたる もの八あるまい」(3 - 15)という歌が挙げることができる。
- [8] 例えば、「いままでハ なにかよるづが ハからいで みなにんけんの 心ばかりで」(3 - 80)。なお、『おふでさき索引』によれば、「にんけんの心」という語句だけでも、3、7、9、15号に2首、6、8号に3首、そして13号に5首にみられる。
- [9] 『おふでさき索引』によれば「をやの心」という語句は、9号に1首、14号に2首にしかみられない。
- [10] このことが比較的明らかに表現されている部分として、例えば、「それゆへに なにを月日が ゆうたとて みなうたごふて ゆいけすばかり」(14 - 11)、月日にハ 大一これがさんねんな なんでもこれを しかとあらわす」(14 - 12)を挙げることができる。
- [11] 29首目に「いままでは 月日とゆうて といたれど もふけふからは なまいかゑるで」とある。

-----

複合語辞書	をしゑ
月日	ふしへ
みな	ふしゑ
から	ざんねん
みち	さんねん
せかい	ざねん
しんぢつ	さねん
しんちつ	かんろ
をもう	はたら
をもふ	せきこ
いままで	いさむ
たすけ	いさめ
はやく	いさん
これから	一ぢよ
一れつ	一ちよ
このよ	
このたび	停止語辞書
にんけん	一寸
けふ	一ぢよ
たんたん	大一
だんだん	四十三
はなし	十人
をや	
つとめ	復活辞書
はじめ	神
はぢめ	心
もと	元
にちにち	
うち	
ぢうよ	
にほん	
をしへ	